

変革の時代の象徴オバマの意味を解く

この文章は一月二二日オバマ大統領就任演説のビデオをインターネットで見ながら書いている。オバマの登場は、一つの歴史に残る時代の転換点なのだから、オバマ自身とそれを動かすアメリカの大衆の背景を皆さん見ておく必要があるのだろう。その意味で好著二冊を紹介したい。

オバマを通じて我々が理解すべきなのは、アメリカという国の特徴、とりわけその底なしの希望と力強さの源泉である。経済的に行き詰まりを見せながら、人々には、今日は昨日より良く、明日は今日より良いという前向きな考えが支配している。これは一体どこから来るのであろうか。

アメリカという国には、「神の前に自立して環境に対峙する個人」という基本原理があるようだ。祖国の迫害から逃れた個人は、土地の私有をベースとして、その前に立ちほだかる環境と戦い、自分の道を切り開いて神の前にその成果を示す。国の役割はそのような自立した個人の所有権を守るだけだ。そこでの機会は皆平等に与えられ、ルールの明白な市場での公平な競争が原則である。

その仕組みが行き過ぎて危機が生じれば、国民は優れたリーダーのもとで統一して事に当たり、間違った仕組みを変革し、新たな未来を創造しようとする。しかし、最初の原則は変わらない。

それは、多様な人が祖国を去り集まったというアメリカ独特の国の在り方だから、日本がそれを真似するよりなものでもない。そもそも日本は、あのワシントンに集まった数百万人の基層にあるものは無視して、これまでもあまりにも楽観的にアメリカの制度や仕組みをその表面だけで導入してきたという問題点があると思う。

そのような挫折しかけた国家アメリカの未来への挑戦を、このグローバルな時代に、多様な文化を経験し優れた視野と理解力を持ち、さまざまな異なるものを融合する力を生まれながらに与えられた新たなリーダーに託そうというのが、オバマ時代の本質である。

①はオバマの生い立ちを自伝やさまざまな資料を引いて要領よくまとめ、彼のケニア、インドネシア、ハワイ、カリフォルニア、ニューヨーク、シカゴと辿った自分のアイデンティティ探しの旅を、二一世紀の多様なアメリカ国民の未来を探す旅に重ねる。そこで、多様

な素質と経験を持つオバマこそが、アメリカだけでなくグローバルな世界をまとめていくにふさわしいリーダーであることを自然に理解させる。アメリカの若者向けに書かれた本で、高校生にも分かるような平易な英文で、分量も少なく適当である。丸善などで一、〇〇〇円札で手に入る本なので、この機会に彼の英文スピーチも含めて、英語でオバマというものを理解するのに最適の本だ。

②はアメリカ文化の専門家である越智明大教授が、大統領選の推移に合わせて地域を動いて追いつながら、白人・黒人、男性・女性、キリスト保守派・リベラルといったさまざまな切り口と、それぞれの地域独自のほぐされた思想や考え方をクロスさせて、一体どのような層がオバマを支持し、下馬評ではありえなかったオバマがいかにして大統領になるに至ったかを分析する。そして最後に、孤立した白人も団結した黒人も、政治に希望を失っていた若者も、アメリカ国民そして社会の総体が、黒人大統領を著者の表現によればアメリカの「弥勒菩薩」的救世主としてあがめるに至った理由を興味深く抉り出す。この本を読むと、アメリカという国は独特の国であることを再認識させられる。



① **Yes We Can: A Biography of Barack Obama**
Garen Thomas
Feiwei and Friends Book / 2008



② **誰がオバマを大統領に選んだのか**
越智道雄
NTT出版 / 2008年12月